



じえみ子のDID日記

PDF版

イラスト にみゅう
シナリオ 月見

製作/編集
ひなた古書堂

こちらは体験版となります。
作品の概要や動作確認等でおつかいください。

じえみ子のD I D日記 体験版

ぴん・ぽん・ぱん・ぽーん♪

このボイスドラマは、じえみ子ちゃん（仮）が様々なD I D体験物語をじえみ子目線で語るオムニバス仕様となっております。
どうぞお楽しみください。

ちなみにD I Dとは、ざっくり端言うと、ピンチになったり縛られたりした女の子を愛でる文化だと思ってください。

では本編をお楽しみください。

1、学生編

その時、じえみ子は学生だった。

上は白、下が黒スカートのシンプルなセーラー服に黒のスクールタイツ。

私の髪が黒のロングヘアだったから全身真っ黒だったけど、友達は可愛いって言うてくれたし、私も気に入っていた。

「職員室倉庫の掃除を押し付けられた、私、可哀想」

引きこもりとまではいかないが、なにかと理由を付けて学校を休みがちな私は、担任の先生から追加レポートと言う名の雑用を言いつけられた。可哀想とか呟いてみたが完全なる自業自得である。

今日は学校が休みなので、賑わっている校舎がシーンと静まり返っている。さっさと掃除を終わらせて、街に遊びに行くんだ。

「うわっ……ゴチャゴチャじゃん。つたく、掃除しがいがあるぜえ」

着いた職員倉庫は、整理がされておらず、ごみ屋敷状態だった。私はバツクを棚に置き、辺りを見回した。

これなら大雑把な荷物をまとめるだけでも十分だし、それをやれば先生も納得してくれるだろうと、さっそく整理を始めた。少し意外だったのが、この倉庫には先に整理作業を行っている人物がいたのだ。

（なんだろ、あの先生……。担任の先生が、か弱い私に援軍をくれたのか。いいところがあるじゃないか）

その時は本気でそう思っていた。

「あ、先生、こんちゃーっす」

とりあえず挨拶を試してみる。

ガヴァツと凄い勢いで振り向いたその先生は、これまた凄い顔で私を見ている。

「アレっ先生……誰」

見たことがない先生だった。いや……先生じゃない、部外者かな、学外の先生かも知れない。その先生はグイグイと私へと近づいてき、さらにグツと腕を掴んできた。

「おわっ……ちよっ先生、痛いってば。私、別に無断で入ってる訳じゃないって、担任の先生から掃除を言いつけられただけだって」

先生は私の言う事などまるで聞いてない素振りで、掴んだ腕をグリツと後ろへと回した。そしてもう片方の腕も同じように後ろに回され、両手首を合わせて押さえつけられた。

「いったあっ……せんせっ、それやり過ぎだってばっ」

先生は、押さえつけた手首が離れないように、何かのロープでグルグルと巻きつけてる。

「せんせっ、痛いよっ」

縛られた。

そう認知した瞬間、私は出口に向かって全力で走り出した。この状況はおかしい、逃げないといけない。しかし後ろ手で縛られているので、出入口のドアを開けるのに手間取ってしまった。

結局扉は、開けられなかった。

気配を感じ、恐る恐る振り返るとギラギラとした真新しい太いカッターの刃が私の喉元へと迫っている。

「いやっ……、せんせい、おとなしくするからさあ……」

涙こそ出なかったが泣きそうな顔だったと思う。そして力づくで部屋の内部まで歩かされた。

ドンツと押され、私は倒れ込む。寝かされた身体、両足首には手と同じような紐が巻かれ、私の自由は奪われた。

（なにこれ、ヤヴァいよ。この先生、もしかして先生じゃないかもお……）



悪い人かも知れない。いやいや、女子生徒を縛ってるだけでも相当な悪い人だと思う。私を拘束した先生は、また部屋のゴソゴソと漁っていた。泥棒かも知れない……。

私は先生に気づかれないように解こうと、手を動かしてみた。力を入れ、手首をロープから抜こうとするが固く縛られたロープは、まったく解かれる気配がない。

「……はあ……はあ、ん……んっ、んんっ……だ、だめだあ……」

両足は揃えて縛られているので、少しづつ足を擦り合わせて、ロープを緩める事にした。

「タイツ履いてるから……手首よりかは、ぬ、抜けやすいかとっ……はあはあ、思ったけど、あまり……くっ、か、変わらないわね……」

数分間ほどロープに集中していたが、ふと、私を拘束した先生の動く音が聞こえない事に気が付いた。

体験版はここまでとなります。

お気に召しましたら、どうぞ本編もよろしくお願いします。

ありがとうございました。

ひなた古書堂
月見